

こんにちは、昔話です

目次

装丁 小林将輝
Cover Illustration : Otto Ubbelohde
"Schneeweißchen und Rosenrot"



はじめに 6



講演録 9

「昔話が語る子どもの成長」



昔話講座

第一章 昔話はおもしろい！——おもしろい話、不思議な話 97

第二章 昔話はどつやつて伝えられてきたのか——口伝えの物語 115

第三章 昔話の語り口——昔話独特の「文法」 127

第四章 昔話は何を語っているのか——若者の成長物語／残酷か？ 145

第五章 昔話はなぜ大切なのか——わたしたちは伝承の途中にある 161



付録

① 昔話の再話とは——いい昔話を子どもに耳にとどけるために 173

② 昔話を語りたい人へ——どつやつて語るのか？ 176

③ 語りと読み聞かせにより昔話集と昔話絵本 179

④ 昔話をもっと知りたい人へ——本の紹介 186



昔話Q&A

・昔話は誰がつくったの？ 96

・昔話は本当にあった話なの？ 114

・昔話ははたれへくちがあるの？ 126

・私が知ってらるゝ「三枚のお札」「と種つ」「三枚のお札」「もあやうたけれど、どまじりか止しなの？」 144

・日本の昔話に「虫」は老人が多いよつ「思えるけれど、なせ？」 166

・昔話では、いしも末っ子が成功するけれど、どつして？ 172



おわりに 198

はじめに

桃太郎や浦島太郎、花咲かじい……。これらの昔話を知らない日本人はいないと思います。昔話は、わたしたちの身近にある存在です。皆さんも、子どもに昔話や昔話絵本を読んで聞かせたりしていることでしょうか。自分の知っている昔話を、子どもに語って聞かせている方もいるかもしれませんね。

けれども、「昔話って何ですか?」とあらためてきかれたら、あまりよく答えられないという方も、多いのではないのでしょうか。または、自分が知っている桃太郎と違う桃太郎の話もあるようだけれど、どちらが正しいのかしら? という疑問をもっている方や、たくさんある昔話絵本のなかからどれを選べばいいのかわからない、と思っている方もいらっしゃると思います。

この本は、そういう方のために、昔話について、基本的なこと、大切なことを

まとめて書いたものです。

昔話はわたしたちの先祖が代々語り伝えてきたおとぎ話です。伝説や創作の童話とは違う、昔話独自の語り方があります。その語り方ひとつひとつにも、話のすじにも、昔の人たち子どもへの思いが込められています。それは、昔話が発している大切なメッセージと深く関わっています。

皆さんにも、昔話のそういう世界をよく理解して、伝承されてきた大切な昔話を子どもたちにたくさん聞かせていただきたいと思うのです。わたしは、昔話は後世に残すべき、大切な文化財だと思っています。

この本は、前半にわたしの講演録を載せ、後半を昔話講座としました。

講演録を通して読むと、昔話に関するいろいろなことが大まかにわかりますし、昔話講座では、テーマ別に詳しい解説をしています。どちらから読んでも理解できるようになってるので、好きなほうから読んでみてください。

それでは、どうぞ。

「講演録」

昔話が語る子どもの成長

昔話が語る子どもたちの成長

昔話はどこにあるのか？

こんにちは。小澤俊夫です。皆さん、昔話はどこにありますか？ とぼくが質問したら、何を思い浮かべますか？ 昔話ってどこにあります？

絵本に書いてあります。昔話集に出ています。と思うかもしれませんが。

ぼくは何十年も前から昔話を聞きに全国各地へ行つて、おじいちゃん、おばあちゃんから昔話を聞いてきました。そういうぼくの実感からすると、昔話が本当にあるのは、それが語られている時間のあいだだけだということです。

昔話は、語られている時間のあいだにだけ存在する。これは昔話を考えるとき、

一番基本的で大切なことですので、皆さんどうぞ覚えておいてください。昔話は、語られている時間のあいだにだけ存在する。ということは、語り終わったら消えるということです。

ですから昔話は、厳密な意味で時間に乗った文芸です。「乗った」という意味は、話が始まって終わるまで、五分なら五分かかる、その時間の流れに乗った、そういう文芸ということです。「時間的文芸」であるということがいえますね。

現代では、これがしばしば忘れられて、目で読む文学のようなつもりで昔話の本や絵本が作られていく危険性がとても多いのです。皆さんも、小説とか物語と違うのはたいいてい本で読んでいます。百ページの本なら、五十ページまで読んでいって、話のすじがよくわからなくなったら、戻って、もう一回読むことができますでしょう。あるいは、途中で立ち止まって考えることもできますでしょう。

昔話ではできません。そこが目で見つめる文学と昔話の大きな違いです。音楽もそうです。音楽も時間的芸術だといわれますね。音楽と昔話とはとても似た性質をもっています。

昔話の語り口

今、昔話はいろいろな本になって、子どもたちに届けられています。ただ、多くの目から見ると、昔話がつ、この性質が間違えられている本が多いのです。まるで目で読む文芸のような作り方をされている本がとても多いのです。具体的に言えば、いろいろな説明や、いろいろな形容の仕方が入ったりしています。昔話というのは、**耳で聞かれてきた文芸**ですから、特徴は、**簡単に明瞭**、ということです。

文章の特徴は、簡単に明瞭であること。シンプルでクリアである、ということとです。文章とか文体っていうと、いかにも書いたものみたいに思われるので、ぼくはなるべく文章とか文体という言葉を使わず、**語り口**といういい方を使います。要するに文章のことですが、「文」というふうにはいいません。

昔話の語り口は、シンプルでクリアである、ということとをまず覚えておいてください。ではそのシンプルでクリアな語り口とはどういうことか、ひとつ実

例を挙げてみましょう。

「馬方とやまんば」。これは、宮城県登米郡の青木のゑさんという方の語ったものを、息子さんの佐々木徳夫さんという研究者が記録なさったものですが、ぼくは初めてそれを見せてもらったとき、とても驚きました。その簡単明瞭な文体は、ぼくがいつているシンプルでクリアな語り口そのものなんです。登米郡のおばあちゃんが理屈を知って語ったわけはありません。自分が子どものころおとなから聞いて楽しかった話を、思い出して語ったわけです。それが、非常にわかりやすい文体になっているのです。

こんな話ですね。

馬方とやまんば

昔、ある村に、ひとりの馬方がいた。

ある日のこと、浜へ行つて、魚をたくさん仕入れて、馬の背にふりわけに積んで、峠の道を帰ってきた。

日が暮れて、あたりが暗くなると、松の木の陰からやまんばがとび出してきて、「これまで、その馬の片荷置いていけ。置かなきゃ、おまえをとって食うぞ」といった。馬方は馬の片荷をひとつうしろへぶん投げて、馬を引いて、わらわら峠の道を逃げていった。

したればやまんば、その片荷の魚をばりばり食っちまうと、すぐまた追いかけてきて、

「これまで、その馬の片荷もうひとつ置いていけ。置かなきゃ、おまえをとって食うぞ」というもんで、馬方は馬の片荷をもうひとつうしろへぶん投げて、裸馬に乗って、わらわら峠の道を逃げていった。

したればやまんば、その片荷の魚もばりばり食っちまうと、すぐまた追いかけてきて、

「これまで、その馬の脚一本置いていけ。置かなきゃ、おまえをとって食うぞ」というもんで、馬方は馬の脚を一本ぶった切つて、そうれつとうしろへ投げて、

三本脚の馬に乗って、がったがったがったと峠の道を逃げていった。

したればやまんば、その馬の脚もばりばり食っちまうと、すぐまた追いかけてきて、

「これまで、その馬の脚もう一本置いていけ。置かなきゃ、おまえをとって食うぞ」というもんで、馬方は馬の脚をもう一本ぶった切つて、そうれつとうしろへ投げて、二本脚の馬に乗って、がったがったがったと峠の道を逃げていった。

したればやまんば、その馬の脚もばりばり食っちまうと、すぐまた追いかけてきて、

「これまで、その馬の脚もう一本置いていけ。置かなきゃ、おまえをとって食うぞ」というもんで、馬方、これはもうとても逃げおおせるもんじやないと思つて、馬を丸ごとそこに置いて、藪やぶをこいで、わらわら山のなかへ逃げていった。

したれば池があつて、池のほとりに高い木があつたもんで、その木によじ登つて、上でじーっと隠れていた。

やまんば、馬にまたがると馬をばりばり食っちまうと、すぐまた追いかけて来た。池のところまで来ると、池の水のなかに馬方の姿が見えたので、

「おめえ、そんなところに隠れていたか。隠れたってだめだぞ」って、池にどぼんとどび込んだ。それを見て、馬方、木からするする降りてきて、また、藪をこいで、わらわら山のなかへ逃げていった。

したれば、うまいことに小屋が一軒あった。こりやいい隠れ家だと思って、小屋にとび込んで、は梁にあがってひと休みしていた。

しばらく休んでいると、なんと、さっきのやまんばがずぶぬれになって入ってきて、

「おーっ、さみいさみい。今日は魚いっぺえ食って、馬まるごと食って、腹いっぱいになった。どれ、甘酒でもわかつて飲むか」といって、いっ囲炉裏に大きな鍋で甘酒をわかしだした。で、自分はくるっと背中向けて、背あぶりを始めた。

甘酒がちやうどわいてきたころ、やまんば、くらーんくらーんとねぶかけ始めた。それを見て、梁の上の馬方、屋根のかやを一本抜いて、つっぱつぱ、甘酒を吸ってしまった。

したれば、やまんば、目を覚まして、

「おれの甘酒を飲んだやつはだれだあ」と叫んだ。梁の上の馬方、ちっちゃい声で、

「火の神、火の神」っていった。やまんばは、

「火の神さまが飲んだんじゃあ、しやあねえ。どれ、餅でも焼いて食うか」といって、餅を火につけて、また自分はくるっと背中を向けて、背あぶりを始めた。

餅が焼けて、ぷーっとふくらんできたころ、やまんば、またくらーんくらーんとねぶかけ始めた。すると、梁の上の馬方、さっきのかやで、餅をつくと刺しては食べ、つくんと刺しては食べ、とうとうみんな食べてしまった。

したれば、やまんば、目を覚まして、

「おれの焼餅、食ったやつはだれだあ」と叫んだ。梁の上の馬方、ちっちゃい声で、

「火の神、火の神」っていった。やまんばは、

「火の神さまが食ったんじゃあ、しやあねえ。じゃ、寝ることにするか。木のからとにへえって寝るか、石のからとにへえって寝るか」と独り言をいった。梁の上の馬方、ちっちゃい声で

「木のからと、木のからと」っていった。やまんばは、

「火の神さまがおっしゃるんじゃあ、木のからとにするか」って、木のからとに入って寝た。

それを見て、馬方、梁から降りてきて、湯をわかして、もみぎりを持ってきて、その木のからとにキリキリキリキリ穴をあけた。やまんば、

「あすは天気だか。きりきり虫が鳴いてらあ」なんていったけど、かまわず、キリキリキリキリ穴をあけて、穴があくと、煮湯ねゆを持ってきて、その穴から煮湯を注ぎ込んだ。やまんば、はじめのうちは、

「このねずみ野郎、小便しょうべんなんかひっかけやがって」っていったけど、かまわず、煮湯を注ぎ込んでいたら、しまいに、やまんば、

「あつつい、あつつい、助けてくれ、助けてくれ」と叫んだ。けれども馬方、

「おれの魚と大事な馬を食ったかたきだ」といって、煮湯をどうどうと注ぎ込んだんで、やまんば、とうとう死んでしまったと。

こんで、えんつこもんつこ、さけた。

発端句と結末句

「こんで、えんつこもんつこ、さけた」というのは、「これで、おとぎ話は終わりだよ」という挨拶で、「結末句」といいます。

なぜ結末句が必要かというと、昔話というのは、おとぎ話、つまり「うそ」の話です。うそ話ですから、「どうして馬が三本脚になっても走れたのか」ときかれても、語り手には説明できません。それで、「ここまでほうそこの話ですよ。わたしの責任じゃありませんよ」と、ガードをはるのです。日本中の語り手がそれをやります。

いろいろ違いはあります。地域によって違うんです。「こんでえんつこもんつこ、さけた」は、宮城県。岩手県では、「どんとはれ」、新潟県では、「これで、いちごさけた」、岡山県では、「しゃーんしゃん」などといいます。

結末句は日本だけでなく、世界中にあります。世界中の民族が昔話をもっています、非常にしばしば、結末句がきます。たとえば、ヨーロッパで有名なのは、「王子と王女はめでたく結婚しました。死んでいなければ、まだ生きているでしょう」というものです。当たり前ですね。そういうことをいって聞き手を笑わせて、ぱっとお話を終えるのです。

この結末句に対応するのが、話の冒頭の言葉です。「昔、ある村に、ひとりの馬方がいた」という、この部分です。「昔、ある村に、ひとりの馬方がいた」ということは、「昔」、「ある村」、「ひとりの馬方」。つまり、時代も場所も人物も誰だかわからない、不特定にいつています。

この語り方。これを「発端句」と、研究者のあいだでは呼んでいます。時代と場所、人物が不特定だということは、これから始まるお話は、おとぎ話ですよっという宣言なんです。信じないでくださいねっという宣言です。うその話ですから、信じないでくださいね、そういう不特定なんです。それで、「昔むかし、あるところに」って始めて、最後に「どっぺんぱらりのぷっ」なんていつて終わるわけです。つまり、うその話を発端句と結末句で囲むわけです。

そうやって現実の世界からお話を隔離します。それを、絵を入れている額ぶちだっという人もいます。おとぎの世界を宣言するんです。